

令和7年5月28日発行

栗原普及センターだより「くりはら」

160号



水稲「乾田直播栽培」の取り組みが管内で広がっています！

乾田直播栽培は、苗を育てて移植する従来の田植え作業を省き、乾いたほ場に種を直接まく栽培法です。育苗や田植えにかかる労力やコストが大幅に削減できるため、大規模経営体における労働力不足対策として注目されています。昨年は栗原管内で約90ha作付されており、今後さらに導入が進むと見込まれています。

新年度の「」挨拶

栗原農業改良普及センター

所長 中條 満

世界の食料需給の変動や地球温暖化の進行、国内の人口減少など社会全体が急速に変化する中、「農政の憲法」ともいわれる「食料・農村・農村基本法」が、昨年、四半世紀ぶりに改正され、本県農政の柱である「みやぎ食と農の県民条例」も、情勢の変化に即した形にすべく、本年三月に改正が行われました。

このような中、県では、「第三期みやぎ食と農の県民条例基本計画」の目指す姿である「豊かな食」、「儲ける農業」、「活力ある農村」の実現に向けて、アグリテックの導入支援等によるDXの推進や需要に応じたみやぎ米の生産、園芸倍増に向けた収益性の高い園芸振興を図るほか、地域計画の実現を促進するため、多様な人材の確保・育成や担い手が抱える課題解決を支援することとしております。

当普及センターでは、令和七年度普及指導計画に掲げる三つのプロジェクト課題により、加工用たまねぎ直播栽培技術の確立や金成有壁地区の活性化ビジョン実現を支援するほか、大豆多収穫技術の体系構築による単収向上の取組を重点的に支援してまいります。

今後も、持続可能な栗原地域の農業・農村の実現を図るため、職員一丸となり農業者の皆様との取組を支援してまいりますのでよろしくお願いいたします。

令和7年度プロジェクト課題紹介

課題No.1 加工用たまねぎの直播栽培技術の確立による収量確保

栗原地域では、令和4年度から「たまねぎ」を地域振興品目に位置づけ、関係機関と一体となり生産振興を図っています。大規模で作付する場合、育苗や定植作業にコストが掛かるため、さらなる面積拡大に向けて直播栽培が注目されています。

令和6年収穫の直播たまねぎは、雑草やべと病の発生による減収が課題となったため、対策を検討し、次作に向けた支援を行いました。例として、雑草については、除草剤とRTK搭載トラクターによる除草機の併用による除草体系を組むことで、一定の効果が示されました。

昨年11月には県農業・園芸総合研究所と連携し、RTK搭載ドローンによる殺菌剤の高濃度散布を実演しました。この実演では、従来の防除方法と比較して時間あたりの作業性が優れることを確

認しました。

今作は冬季の寒さなどによって、たまねぎの生育停滞がみられるなど新たな課題がみられているため、今後の改善に向けて支援していきます。



【令和6年度のたまねぎ収穫の様子】

課題No.2 金成有壁地区の活性化ビジョンの実現

金成有壁地区では、農地整備を契機に地域の活性化を図るため、令和2年に「農村地域活性化ビジョン」が策定されました。

ビジョンでは、地元の萩野酒造株式会社と連携し酒造好適米品種の栽培を通じて地域内外の人々との交流を深める地域活性化構想や、農業法人の設立を軸とする担い手構想などが掲げられています。

普及センターでは、昨年度から、ビジョン実現に向けて設立された「天水の郷『有壁創生会』」を対象に、萩野酒造株式会社との連携強化や地域農業の担い手となる農業法人の設立に向けて支援しています。今年度も引き続き、田植え体験や稲

刈り体験等の地域活性化への取組を通じた連携強化や法人設立に向けた地域での話し合い等を支援してまいります。



【令和6年度の田植え体験の様子】

課題No.3 土地利用型経営体大豆多収穫技術の体系構築による単収の向上

令和6、7年度の2か年、若柳地区と志波姫地区の経営体を対象に、大豆の単収向上を目指した活動をしています。昨年度の活動では、両経営体ともに、ほ場の排水不良や難防除雑草の発生という課題が明らかとなりました。

令和7年度は、「大豆栽培チェックリスト」を活用し、ほ場の「排水対策」を徹底することや、精度の高い管理作業を適期に実施することで、難防除雑草の抑制を目指します。また、各ほ場の土壌条件や雑草の発生状況を記録した「大豆栽培支援マップ」により、ほ場毎の条件に合った栽培管理作業の組み立てを行います。普及センターでは、

栗原管内の大豆の収量・品質の高位安定化を目指した支援を行っていきます。



【RTK直進アシストによる中耕培土実演会】

きゅうりのCO₂局所施用による生育促進技術について

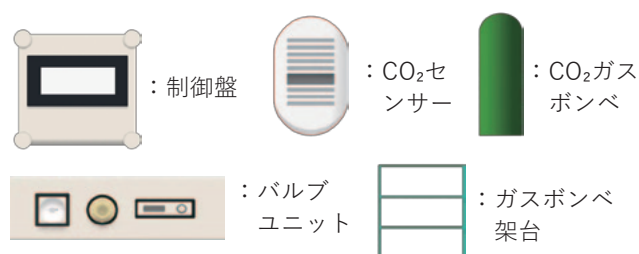
果菜類等の施設園芸において、光合成に必要なCO₂(二酸化炭素)を施用することで収量や品質を高める技術が県内各地で普及しています。このうち、JA新みやぎ栗っこきゅうり部会では、2経営体が株式会社オムニア・コンチェルト製の「CO₂局所施用」技術を導入しています。(※モデルケースは下記参照)

同社のCO₂局所施用技術は、専用の制御盤でハウス内のCO₂濃度をモニタリングし、施用濃度や施用時間を設定したうえで液化炭酸ガスを植物体周辺に設置した専用チューブから施用する方式です。灯油等

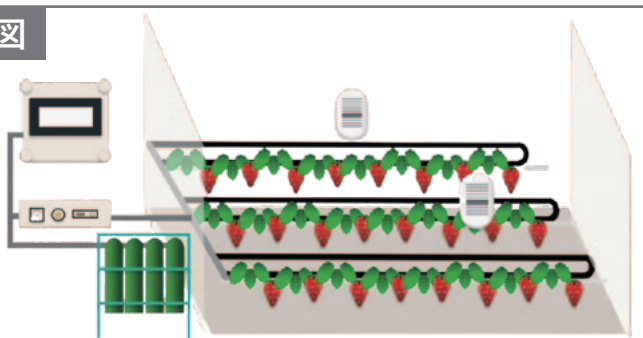
を燃焼させる施用方法と比較して、効率的にCO₂を植物体に届けることで生育促進が期待できます。また、温室効果ガスの排出が最少限で済むため、環境負荷の低減にも繋がるとされています。

昨年度導入した経営体では、きゅうりの総収量が1割以上向上したほか、秀品率が改善したとの声も挙がっています。また、上記システムはいちごやトマト等の施設園芸品目のほか、林木育種等林業への導入事例があります。現在施設園芸に取り組まれており、関心のある方は普及センターへ是非ご相談下さい。

凡例



図



宮城県農業大学校では令和8年度の入校生を募集します！

宮城県農業大学校は、農業の近代化と経済社会の発展に対応できる「高度な知識・技術」を身につけた優れた農業経営者と、農村地域の指導者を育成することを目的として、実践的教育を行う2年制の専修学校です。令和8年度の入校生を、次のとおり募集しています。

- ・**募集人員**：55人（水田経営学部15人、園芸学部15人、畜産学部15人、アグリビジネス学部10人）
- ・**受験資格**：高等学校卒業者（令和8年3月卒業見込みの者を含む）又は、これと同等以上の学力があると認められ、本県農業の振興に貢献する意欲がある者。

・試験概要

試験区分	募集期間（必着）	試験日	試験科目
推薦入校試験 (学校長推薦) (地域推薦)※1	令和7年9月1日（月） ～9月16日（火）	令和7年10月1日（水）	○筆記試験 小論文 ○個人面接
一般入校試験 (前期)	令和7年11月4日（火） ～11月17日（月）	令和7年12月2日（火）	○筆記試験 現代の国語及び 言語文化、数学、 小論文
一般入校試験 (後期)※2	令和8年1月19日（月） ～2月2日（月）	令和8年2月17日（火）	○個人面接

※1 既卒者を対象とした推薦制度。卒業後、県内において認定農業者又は認定新規就農者を目指すか、認定農業者（農業法人を含む）の後継者で、県内において当該経営を継承する意思がある者を普及センター所長等が推薦します。詳しくは普及センターにお問い合わせください。

※2 定員に達した学部は、一般入校試験（後期）を実施しないことがあります。

お問い合わせ先：宮城県農業大学校 教務部
学生班・教務班 TEL 022-383-8138

栗原農業改良普及センターの活動や各種相談、技術情報（稲作通信等）はここから！⇒



令和7年度 栗原農業振興部（農業改良普及センター）職員紹介

総括技術次長
【野菜】

み かみ
三 上

転

部長兼農業改良
普及センター所長
【畜産】

なか じょう
中 條

技術副参事兼
総括次長
【野菜・経営】

た なか
田 中

技術次長
(経営支援担当)
【畜産】

さ さ き
佐々木

再

地域農業班

技術次長(班長)

【花き・経営】

さ と う
佐藤(英)

技術主査【作物】

い の
猪 野

技 師【花き】

あら かわ
荒 川

技 師【果樹】

あい ざわ
相 澤

再

転

転

新

〈主な業務〉

- ・地域農業振興計画
- ・地域営農システム構築の支援
- ・多様な担い手の確保・育成
- ・農業士
- ・新規就農者及び女性農業者の育成

先進技術班

技術次長(班長)

【野菜・経営】

ふな やま
船 山

技術主任主査【作物】

ほり うち
堀 内

技 師【野菜】

かしわ や
柏 谷

技 師【作物】

さ と う
佐藤(颯)

会計年度任用職員

ち ば
千 葉

再

転

：令和7年度転入職員

地域調整班

主 幹(班長)

みず たに
水 谷

技術主任主査

さ と う
佐藤(啓)

再

主 事

こ まる
小 丸

新

農地中間管理機構

み うら
三 浦

えん どう
遠 藤

〈主な業務〉

- ・農地中間管理事業
- ・経営所得安定対策
- ・土壌汚染対策
- ・みどり認定
- ・農産物県認証
- ・農地法

新

：新規採用職員

再

：再任用職員

農作業安全および熱中症対策を心がけましょう

春先から初夏にかけて乗用トラクターの使用回数が増えると、転倒や巻き込まれ事故が多く発生する傾向があります。乗用トラクター作業では、以下の2点を徹底することが、重大事故を未然に防ぐことに繋がります。

- ・安全キャブやフレーム付きの機種を使用してヘルメットとシートベルトを装着する。
- ・運転席から離席する際は可動部を停止する。

また、例年5月頃から熱中症が頻発する傾向があります。猛暑日となる日は複数人で作業するよう心掛け、やむを得ず単独作業となる場合は、携帯電話でこまめに連絡を取り合うなど、命を守るための対策を行いましょう。



※農林水産省「農作業安全対策」HPより引用

